



教師として大切にしたいこと

～子どもを伸ばす先生～



楽しく笑顔あふれる学級
にしたい！

子どもを伸ばす先生の指導力
の秘密をもっと知りたい！



あの先生と同じようにやっているのにうまくいかない...。前はうまくいったのに、今回はしっくりいかない...。そんな経験はありませんか？

同じようにやっているようでも、子どもを伸ばす先生には、秘密があるのです。



もくじ

子どもを伸ばす先生とは ----- 1

「見る」 ----- 2, 3

○見ることは、子どもに安心感を与え、力を高める第一歩

- ・一人一人を「見る」
- ・子ども集団を「見る」

コラム

「聞く」 ----- 4, 5

○聞くことは、子どもとの関係性を築く第一歩

- ・子どもの話しやすい状況をつくる
- ・子どもの声を聞きに行く

「認める」 ----- 6, 7

○認めることは、子どもの意欲を育てる第一歩

- ・子どものがんばりや熱意に目を向ける
- ・一人一人のよさを引き出す
- ・多様な方法で「認める」

若手教師のための学級づくり ----- 8, 9

○「見る 聞く 認める」を大切にしたい学級づくり

- ・出会いの「見る 聞く 認める」

○ここまではやっておきたい4月の学級づくり

- ・学級目標づくり
- ・4月の組織づくり

「子どもを伸ばす先生とは」

今日の卒業式は、感動的な式になりました。



これも学年の先生方のかかわりがあったからこそですね。

卒業式終了後、教室で生徒がお礼の色紙を担当の先生に送りました。

先生の笑顔最高。笑顔で声をかけてくれたから、毎日元気が出ました。
(愛情)



先生に教えてもらって、数学が好きになりました。中3になって、自分は伸びました。(使命感・専門性)

いけないことは、いけないと言って、私たちが正しい方向に導いてくれてありがとう。
(正義感)

自分の悪いところだけでなく、よいところをたくさん見付けてくれてうれしかったです。(人権感覚)

相談にのってもらい、アドバイスしてくれてうれしかったです。先生がいなければ今の自分はなかったです。(子どもとのコミュニケーション・児童生徒理解)

勉強が苦手な僕にもいつも声をかけてくれてうれしかったです。
(公正・公平)

入試では最後の最後まで僕のことを信じてくれてありがとう。(信頼)

バスケット部の顧問の先生といつも相談してくれて、高校を決めるときは、2人で僕を励ましてくれました。高校でもバスケット頑張ります。
(同僚性・職員同士のコミュニケーション)

みんな1年間ありがとう！

担任の先生は、教師としての人間力やバランス感覚を大切にしながら、日々子どもに接して来られました。子どもから届いた色紙は、一年間の子どもの成長を感じさせる内容でいっぱいでした。

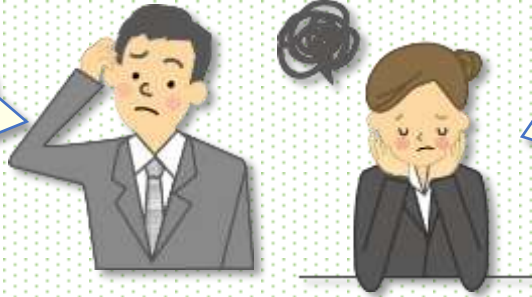
「子どもを理解することや子どもと信頼関係を築くことが難しくなった」という声をよく耳にします。そこで、西部教育局では、教師のあるべき姿について改めて考え、子どもとの関係性向上や子どもの能力伸長を図るためには、「見る聞く認める」の丁寧なかかわりが大切ではないかと考えました。

本リーフレットでは、これらのかかわりを、子どもと信頼関係を築き、意欲を伸ばす指導のための第一歩としてとらえ、紹介させていただいています。

「見る」

見ることは、子どもに安心感を与え、力を高める第一歩

毎日みんなをしっかりと見てるけど、何がダメなんだろう？



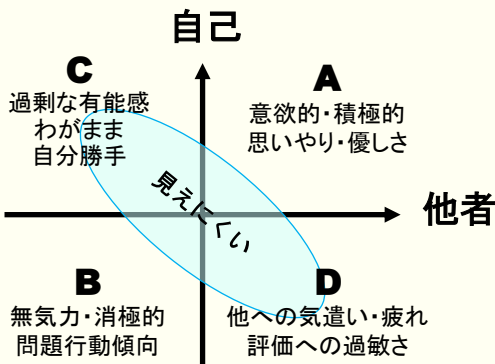
見てるつもりだけど、どうも子ども同士の関係性がうまくいかないな。

教師が子どもを「見る」ことは、児童生徒理解を進める上で、とても大切なことです。意識して「見る」ことは、一人一人の子どもが生き生きと生活したり、悩みを解消したりすることにつながります。教師の「見る」ことについて考えたいと思います。

一人一人を「見る」

「先生、今日部活に来ますか」多忙な日々を送る教師に対し、中学生が顧問の教師に声をかけてきます。中学生ともなると、幼児や小学校低学年の子どものように「見て！見て！」と素直に表現することは少なくなってきました。しかし、小学生であっても中学生であっても内心は、「自分のことを見てほしい」「自分に関心を寄せてほしい」と思っているのです。

「自立は依存に裏付けられる」という言葉があります。人は「誰かが自分のことを見てくれる」「誰かが自分のために何かをしてくれる」と感じることでこそ、初めて自立に向かっていくことができるのです。教師が日々温かいまなざしを向け接することが、子どもの安心感や立ち上がる力をはぐくむことにつながっていくのです。



教師から見えにくい子ども

A⇔Bゾーンの子どもは、良くも悪くも教師から見えやすい子どもです。

逆に、C⇔Dゾーンの子どもは、教師から見えにくい子どもです。

見えにくい子どもこそ、教育活動の中心に据えていくことが大切です。



心は隠せない

授業中、教師が近付くと、突然ノートに書いていたものを消し始める子どもがいます。自分の考えに自信がもてず、慌てて消しゴムを手にしたのだなということを教師は理解します。小学校では、「筆箱、靴箱、道具箱」が子どもを見るポイントだと言われます。筆箱を見れば、鉛筆の削り具合や学習の準備状況から、学習に対する意欲が見えてきます。また、靴箱や道具箱を見ると、整理整頓の具合から生活(心)の落ち着きが見えてきます。時には、靴隠しや落書きといったことからいじめの発見につながることもあるでしょう。

人の心は、知らず知らずのうちに表情や行動に表れてしまうものです。子ども一人一人の変化に気付く教師としての目を養いたいものです。

「見る」

見ることは、子どもに安心感を与え、力を高める第一歩

子ども集団を「見る」

「子ども一人一人を見る」こととあわせて「子ども集団を見る」ことが大切です。学校の楽しさとは、できなかった計算ができるようになったり、跳べなかった跳び箱が跳べるようになったりするなどの自己実現の楽しさです。しかも、それらが友だちの励ましの中で行われるからこそ楽しいのです。子どもが伸びるためには、安心して力を発揮できる集団が形成されなければならないと言えます。次は、一人一人が安心して力を発揮できない集団の特徴です。

子どもが内緒話をする場面をよく見かける。
正しい意見や係への立候補が出にくい雰囲気を感じる。
教室の掲示物へのいたずらや黒板への落書きがある。
班や座席を決める際にスムーズに決まらない。
国語、英語、音楽などの授業で元気よく声が出せない。
学校行事の練習などで学級全体が協力して活動できない。
遊び仲間の構成が頻繁に変わる。
係や当番の仕事を他人に押しつけることがまかり通る。
「プロレスごっこ」等、相手を痛い目に合わず遊びがはやる。
人の失敗をばかにして笑ったり、ここぞとばかりに責めたりする風潮がある。



集団の変化には、かかわる教師の人間性や姿勢が大きく影響します。教師が日頃から、何を褒め、何を悲しみ、何を怒り、どんなことを共に喜び、どんなことを絶対に許さず、どのように子どもに接したのが等、教師の人間性や、子どもにかかわる指導の姿勢によって左右されるのです。子ども集団を見ながら、絶えず教師が自分自身を振り返り、集団の実態や状況に即して柔軟に働きかけることが大切です。そのためには、効果的で多様な指導方法や指導技術を磨いていくことが求められます。

教師自ら、子どもや子ども集団に働きかけること

子どもを理解することは、よりよい教育活動のための第一歩と言えます。私たちは、指導要録や諸検査、前担任からの引継ぎにより、子どもの基本的な部分を捉えます。しかし、そのような基本的な捉えただけで子どもを理解した気持ちになってはいないでしょうか。

変化し続ける子どもや子ども集団を見続け、「子どもと対話する時間をもつ」「休憩時間の過ごし方等にも目を配る」「日記や作文を通して子どもを見る」といった、教師からの具体的かつ継続的な働きかけが不可欠です。



コラム

「子ども目線で話を聞く」と言われますが、教師の「目の高さ」が子どもに与える影響は非常に大きく、それぞれの指導場面で使い分けることが大切です。

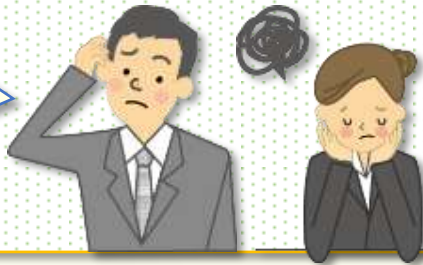
例えば、何か指示を与える時、子どもが座った状態で教師が立って話をすると指示が通りやすくなります。また、子どもの思いを傾聴する時には、教師も横に座り、子どもの目の高さに合わせて話を聞くようにすると、子どもは心理的なプレッシャーを感じません。それだけ教師の目線は大切なのです。



「聞く」

聞くことは、子どもとの関係性を築く第一歩

学級開きから1か月、子どもの気持ちが十分理解できているかな。



子どもと近くなるために、どんなアプローチが考えられるのだろう。

話を聞いてもらうと、自分のことを理解してもらえた、尊重してもらえた、関心を向けてもらえたと感じ、その人に対し好感をもつとともに、信頼感を抱くようになります。教師が子どもの声に耳を傾け、思いを受けとめることで、教師と子どもとの関係性が深まります。

子どもの話しやすい状況をつくる

◎この子の言いたいことはなんだろう？

子どもの思いを受けとめるためには

×子どもを励まして、何とかしよう

◎どんな気持ちなんだろう？



×やる気がないから話を聞いて説得しよう！

子どもの気持ちを一つ一つ丁寧に受け取る

①話しやすい場所、座席で ②じっくり待つ ③子ども目線で警戒心を解きながら ④共感して聞く

子どもから出てくる思いは様々であり、教師は、普段思ってもみななかった子どもの本音と出会います。そんな子どもの思いや本音に対し、教師が話をうばったり、結論を出すことを急いだりしないように心がけ、一つ一つ丁寧に子どもの思いを受け取っていききたいものです。

時には、感情を露わにし、涙したり、腹を立てたりしている子どもの話を聞く場面もあることでしょう。そんな姿に隠れている子どもの本当の気持ちは、「自分が大切にされていない」という感情です。当然、事実に対し聞き取りをしたり、指導したりしますが、まずは、教師がその子どもなりの気持ちを十分受けとめることで、子どもの心を開くようにすることが大切です。



事実より気持ち

子どもも大人も、自分のことをわかってほしいという気持ちを持ち、わかってもらえる支援者に好感をもつのではないのでしょうか。本当に伝えたいのは、「事実より気持ち」ととらえ、相手の気持ちを受けとめ、子どもが「この人ならわかってくれる」「この人ならきっと私のことを大切にしてくれる」という思いがもてるよう、かかわっていききたいものです。

教師が公平に接する姿勢を崩した時に子どもは不安になり、集団は不安定になります。そして、一人一人の子どもから不満が生まれます。声をかける子どもや話を聞く子どもに偏りはありませんか？子どもの不安や不満を感じた時には、教師の次の一手が大切になります。

子どもの声を聞きに行く

「声なき声に耳を傾ける」

日々熱意を持って、生徒をグイグイ引っ張ろうとしていた若い頃の自分。授業では、生徒が集中して取り組んでいると思っていた。

10年が経ち、気付いたことがある。

当時の私は、自分の発問に対し、挙手し答える生徒だけで授業を進めていた。そして、ごくたまに手を挙げていない生徒を指名することもあった。

今思えば、こちらが期待する反応を示す生徒だけを大切にしていた。発言せず、静かに話を聞くだけのAさん、50分間ずっと下を向いていたB君。そんな生徒のために、自分は何をしてきたのだろうかと考えるようになった。



訴えやアピールの少ない子どもも、伝えたい気持ちや思いをもっています。すべての子どもの思いを受けとめようとしているでしょうか。授業づくりでは、すべての子どもの思いが大切にされているかを振り返ることで、見えてくるものがあります。おとなしい子どもや勉強が苦手な子どもの声に耳を傾けることで、教師との関係性も良好になり、日常の授業が変わってくるのではないのでしょうか。

「自分の周りには、三つの輪がある」

C子は、春から日記を提出しない日が続いていた。何となく「よくわからない子」と思っていた。

新学期から3ヶ月が経ち、私は、変わらずいつも話しかけてくれる子どもたちに囲まれていた。自分では、いろいろな子どもたちの話を聞いているつもりだったが、ある時、自分の周りには、三重の輪があることに気が付いた。

先頭を切って「先生」と言って近付いて、身体に触れるほど寄ってくる子ども、一緒に近くに来ているのだけれど、ちょっと後にまわって控え目な子ども、そして、先生と仲良く話している様子を教室の窓にもたれて、ジーとこちらを見ている子の三重の輪である。

C子は、窓際でずっと私のことを見ていた。「この子に対して自分は何をしてきたのだろうか」と考えさせられた瞬間だった。



教師と子どもとの距離感は子どもによって様々。うまく行かない時こそ、寄り添ってみるのが大切です。

東に病気の子もあれば、 行って看病してやり
西に疲れた母あれば、 行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば、 行って怖がらなくてもいいと言い
北にケンカや訴訟があれば、 行ってつまらないからやめろと言い（宮沢賢治）

受容と共感の第一歩は、教師が行動し、寄り添い、耳を傾けることから始まります。

「認める」

認めることは、子どもの意欲を育てる第一歩

最近何だか子どもの悪いところばかりが目につくな。



私の褒め言葉って、もしかしたら子どもの心に届いていないのかも。

「自信のある子どもが少ない」「学習や将来の生活に対し、無気力で不安を感じている子どもが増えている」といったことが指摘されています。やり遂げる力をもちながら、失敗を恐れ、自分の力を発揮できない子どもも少なくありません。「自分は有用な存在である」と子どもが感じることができるよう、教師が子どもを認め育てることが大切です。一人一人のよさに目を向け、肯定的な評価を行うことにより、子どもの生活への意欲は高まります。

子どものがんばりや熱意に目を向ける

マラソン大会で1位になった。部活動の部長になった。そんな華々しい結果や目立つことに対しては比較的目標が向きやすく、肯定的な言葉かけもしやすいものです。しかし、本当に大切にしたいのは、子どもの小さながんばりや地道な取組を価値付けていくことです。「マラソン大会で上位入賞は果たせなかったけれど、毎日のマラソン練習に欠かさず参加した」「部長ではないが、準備や片付けを率先して行った」といった子どもの事実を褒めていくのです。そのような教師のかかわりを通して、子どもは「自分は有用な存在である」と自覚していきます。子どものよさや気付きを認めることのできる教師であることが大切です。

- ◆目立たなくても責任をもってやりとげたことを認める
- ◆いつもと同じように継続している取組を認める
- ◆目標まで行き着かないが、その子なりに全力で取り組んだことを認める

このようなちょっとしたがんばりや熱意を見逃さないためにも常日頃から子どもを注意深く見守り、その変化をメモしておくことが必要です。



具体的に褒め、子どもが納得できるように

小学校低学年では、「すごいね」と褒めたり、ノートに花丸を付けたりすれば大喜びします。しかし、中学年ぐらいになると、ただ単に褒めるだけでは、子どもは納得しません。子どもが納得するためには、自分のよさを自分自身で実感できることが大切です。表面的に言葉かけを行うのではなく、教師が「何がどうよかったのか」「なぜその行為に価値があるのか」を具体的に伝え、子ども自身がよさを実感できるように声かけをする必要があります。

高学年になると、この傾向は一層強まります。ただ単に「すごいね」と褒めたり、表面的な言葉かけをするだけでは、教師の見方の浅さに失望する子どもも出てきます。

子どものよいところ、努力したこと、進歩した部分を見付け、「それがなぜよいのか」具体的な価値付けを行い、子どもが自分のよさを実感しながら受けとめられるようにしたいものです。

認めることは、子どもの意欲を育てる第一歩

一人一人のよさを引き出す

どの子どもも「教師から認められたい」という欲求をもっています。学級の中で誰か認められている子どもがいると、それを見ている他の子どもの認められたい欲求は刺激されます。すべての子どもに、教師と感情を交流する場が用意され「先生はあなたのことを大事に見ているよ」というメッセージが届けられることが大切です。

子どもに役割を与えたり、体験活動を取り入れたりすることは、子どもがよさを発揮する絶好の機会となり、「〇〇くんは、野菜を切るのが上手だ」「〇〇さんは、下の学年の面倒を見るのが上手だ」等、新たなよさを見出すきっかけとなったり、教師が認める場が広がったりします。子どものよさを認めるためには、学級の活動や学校行事等で、子どもが進んで自分自身のよさを発揮できるような場や機会を教師自身が意図的に設定し、そのよさを見逃さないことが必要です。

みんな違ってみんないい

人にはそれぞれ得意なことや苦手なこと、好きなことや嫌いなことがあります。子どもが何かに取り組む際にも様々な姿が見られます。例えば、体育の学習の様子一つをとっても、毎時間自己記録を更新しようと挑戦する子ども、教えてもらった走り方を繰り返し練習する子ども、不得意な種目でもあきらめず最後までやり遂げる子ども、集団行動のルールを守り行動する子どもと、その姿は様々です。子どもを認める際には、人にはそれぞれのよさがあり、自分なりに向上しようとするのが大事であるということを子どもがしっかり理解できるようにすることが大切です。そのためにも教師の対応や態度として次のようなことが求められます。

- ◆子どもの取り組む姿勢に目を向け、価値付けること
- ◆結果以上に、子どもが取り組んだプロセスに注目すること
- ◆子ども相互や教師の理想と比較するのではなく、子どもの変容に注目すること

多様な方法で「認める」

教室に掲示されている作品等に教師のコメントが加えられているものを目にします。子どもがどのような姿で作品等の制作に向かっていたのかがよくわかるコメントに出会うと、子どもがこのコメントを読んでさらに意欲をもつ姿が目に見えます。きっと周囲の子どももこのコメントを見て、同じように友だちの頑張りを認めていくのだろうとうれしくなってきます。子どもを認める方法は、直接本人に話すことではありません。学級通信や連絡帳、ノートへのコメント等の多様な方法で認め、子どもの意欲を引き出したいものです。

子どもは好きな人からしか学ばない

子どもは「教師が自分のことをどう思っているか」ということにとっても敏感です。教師が苦手だと感じている子どもが、教師を好きになることはありませんし、その教師から学ぼうと思わないでしょう。だからといって、教師が子どもに迎合すればよい、ということでもありません。子どもは、自分のよさを見付け、認めてくれる人に好意を寄せます。教師が子どもを好きであることが、子どもの学ぶ意欲を育てる第一歩であると言えるのです。

教師として大切にしたい「見る・聞く・認める」は、不易の教育活動です。「見る・聞く・認める」は、子どもが安心して学校生活を送るとともに、自らの力を高めるために様々なことにチャレンジしていこうという意欲にもつながります。「見る・聞く・認める」を大切にしたい学校・学級づくり、授業づくりを一年間を通して進めていくことが大切です。

「見ること」は、 「子どもに安心感を与え、力を高める第一歩」

「聞くこと」は、 「子どもとの関係性を築く第一歩」

「認めること」は、 「子どもの意欲を育てる第一歩」

「見る・聞く・認める」ことを大切にしたい学級づくりについては、毎月の校長会連絡でも継続して情報発信して参ります。



「見る 聞く 認める」を大切にした学級づくり

子どもをつなぐ、子どもとつながる「見る 聞く 認める」

「見る 聞く 認める」は、子ども一人一人を理解するツールです。大切なのは、子どもの成長をイメージすることです。



何のために、何をどのように「見る 聞く 認める」のか、教師が明確なねらいを持つことがポイントです。

4月の過ごし方が1年間を決めると言っても過言ではありません。黄金の3日間などと呼ばれ、出会いの演出や4月はじめの学級づくりのポイントがたくさんの実践家によって示されています。しかし、ここで大切なのは、それらの実践をただやってみるだけではなく、子どもの実態に合わせ、明確なねらいを持って取り組むということです。その際にベースになるのが、「見る 聞く 認める」ことによる児童生徒理解なのです。

出会いの「見る 聞く 認める」

新学期の出会いで大切なのは、新しい環境に子どもが希望や期待をもてるようにすることです。4月は、期待と不安が入り交じる時期です。子どもと教師との相互理解を深め、一人一人が「この先生となら頑張っていける」「この学級にいると安心だ」といった子どもの思いを育て、新たな環境に対し、自信を深めるように配慮します。

新学期スタートにおいても、教師の「見る 聞く 認める」は、指導の基本となります。子どもの表情から内面を見取ったり、本人の願いを聞き取ったりすることを通して、前向きな思いを認め、生活への意欲を高めます。

◆「見る」

子どもの表情を見つめ、一人一人が安心して生活できているのかを確認します。「子どもの人間関係の中で役割を押しつけられている子どもがいないか」「ペアやグループ活動で表現する機会が与えられず、思いを十分に表現できていない子どもがいないか」等、子ども同士の関係性にも目を向け、必要に応じ、声をかけるようにします。

◆「聞く」

子どもの緊張感が高い新たな環境の中で、どのような願いをもっているのかを教師が工夫して引き出すようにします。タイミングを見て意図的に声をかけたり、「先生にこっそり伝えたいこと」といった項目を含むアンケートを実施したりすることで、子どもの本音に耳を傾けるようにします。この時期は、子どもが本音を出しやすい時期で、その本音を大切にした学級づくりを進めます。

◆「認める」

教師から褒められることで、自信をもって生活できるようになります。ルールを守っている子どもを褒め、その行動のよさを波及させることをねらうとともに、褒めることを通して一人一人の自尊感情を高めます。これまでとは一味違う新たな自分づくりに挑戦できるようにしていきます。

指導の基本は「見る、聞く」から「認める」ことへ

「自分のことを見てくれる先生だから安心」「思いを聞いてくれる先生だからもっと話してみたい」といったように、新学期当初は、子どもを見て、子どもの思いを聞くところから指導は始まります。そして、子どもの行動を価値付けながら、新たな生活に挑戦する意欲を持つことができるようになります。



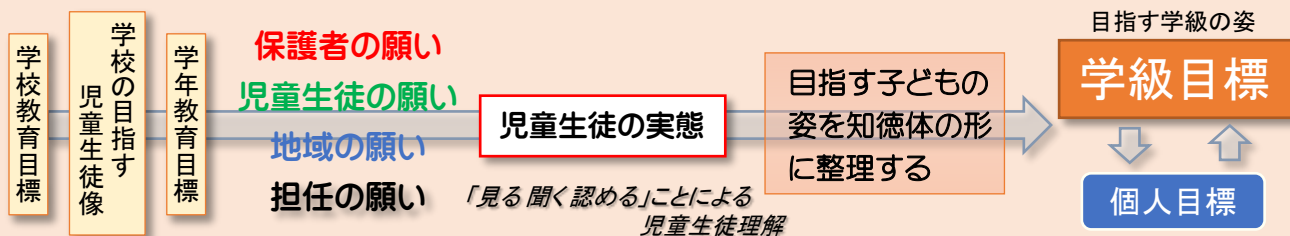
「ここまではやっておきたい4月の学級づくり」

子どもをつなぐ、子どもとつながる「見る 聞く 認める」

年度当初の学級は、たまたま同じ船に乗り合わせたような子どもの集まりにすぎません。4月の学級づくりは、現在の子どもの情報をもとに、ゴール地点(目指す児童生徒像)を見定めることから始まります。そのためには、子どもを多面的に「見る 聞く 認める」ことを通して、児童生徒一人一人についての理解を深めることが大切です。

学級目標づくり

学級目標は学校の目指す児童生徒像をもとに、保護者や地域、児童生徒の願いを込めて**担任が中心となって作り**ます。どの学級も学校の目指す児童生徒像の達成に向かって取り組むことで、「学校全体で児童生徒を育てる」風土をつくります。児童生徒の願いを引き出すにあたって、**まずは「見る 聞く 認める」ことにより、児童生徒理解を進める**ことが基本となります。



学級目標を学級会で決めている例を見かけます。子どもだけで話し合うと、何となく語呂がいいものに決まったり、発言力の強い子の案が通ったりしがちです。また、系統性が考えられていない場合、下の学年の方が高い目標になっていることもあります。

学級目標は、合言葉やスローガンではなく目指す学級の姿です。目指す学級の姿に近づくために、目指す子どもの姿である個人目標を決め、一人一人が達成に向けて努力をしていきます。学級目標づくりのためには、まず児童生徒理解を丁寧に行うなど、実態把握をしなければなりません。その際にも新年度を迎えて**一人一人の変化や個性を「見る」、子どもが理想とするクラス像を「聞く」、一人一人の思いを「認める」ことを大切に**し、必ず多面的な見方をします。基本的には、話し合いを通して「〇〇な子」(知徳体)の形に整理していきます。

指導の基本は褒めること

4月は新しい環境で新しい生活が始まります。子どもの中には、みんなで考えた**ルールを守って適切な行動をしようとする姿**が必ず見られます。そのような姿を見逃さず、**手本になる行動として褒めます**。ルールを守らない子どもに対しても一方的に叱りつけるのではなく、話をする機会を設け、子どもの言い分に耳を傾けてみる必要があります。一人一人の子どもとの「見る 聞く 認める」を大切にしかかわりを通して、スタートの1週間は特に丁寧にルールの確認をしていきます。

4月の組織づくり

4月には、学級会をはじめとする学級における組織をつくります。学級の組織は、児童生徒の自治的な活動として位置づけられ、児童生徒同士の良い関係性があるからこそより豊かな活動が期待できます。児童生徒同士の良い関係性づくりのためには、お互いが関心を持ち、前向きに評価し合えることが必要です。そのためにも、まずは教師自身が子どもを温かく見つめ、思いをしっかりと聞き、よさを進んで褒め、子どものモデルとなるようなかわりを行います。

係の活動では、一人一人の興味関心をもとに個性が発揮されます。給食時間や帰りの会の時に係からの連絡や発表の時間を設け、日常的に役立ち感を感じることができるようにします。より充実した活動にするためには活動の時間を十分に確保し、係活動のために生活が楽しくなったり便利になったりすることが実感できるようにすることが大切です。

教室環境の活用

子どもがお互いに関心を持ち、積極的に評価し合えるようにするために、**教室掲示を活用**します。例えば、学級活動コーナーには、輪番制で行う司会団の名前や、学級会の記録、次回の予定などを掲示します。個人の具体的な考えやアイデアを生かした教室掲示によって、**次への意欲を生み出す効果を期待**します。



西部教育局は、市町村教育委員会と連携し、先生方の学級づくりを支援します。

西部教育局学校教育担当は、市町村教育委員会と連携し、各学校のニーズに応じて学級づくり・仲間づくりについて支援していきます。学級づくり・仲間づくりに関する疑問や悩みがありましたら、お気軽に声をおかけ下さい。

【連絡先】

鳥取県教育委員会事務局

西部教育局学校教育担当

TEL (0859) 31-9773～9776

FAX (0859) 35-2096

E-mail : seibukyoiku@pref.tottori.jp

西部地区の子どもたちの
笑顔を見るのがわしの楽し
みじゃ！疑問、質問、問い
合わせを待っておるぞ！



甲斐善之助